

かけはし

中国残留日本人支援団体 尼崎日本語教室 コスモスの会だより 第16号 2019.1.1

編集発行：コスモスの会広報部 〒661-0953 尼崎市東園田町4丁目152-16 TEL：06-6493-5563
コスモスの会ホームページ・URL=http://kosumosunokai.sakura.ne.jp/index.html FAX：06-6493-0817

地域交流盆踊り
8月28日 お互いに浴衣を着付けして、阪神出屋敷駅前広場の会場まで移動。そこへ直接参加の人たちも集まり、みなで楽しく平和盆踊りに参加しました。
(藤田順子)



着付けを終えた学習者たち

中央地域公民館まつりに参加

10月20〜21日、中央地域公民館まつりが開催され、コスモスの会は展示発表で参加しました。日本語教室の状況を紹介するとともに、学習者が作った短歌や、作文などを展示。特に、学習者が作った紙バンドを編んだ籠が来訪者の注目を浴びました。
(田村博志)



公民館まつりの展示

た。交通マナー悪さや列の割り込みなど日常茶飯事の中国人であるが、車内で高齢者へ労りを示すのは当たり前のことらしい。
日本では、混んでいる車内の優先座席に若者が堂々と座り、周りの弱者など見向きもせずスマホに耽っている。意外な中国人の態度にビックリ！
(T)

あんな話、こんな話

猫好きの日本人は猫に関する言葉をたくさん創ってきました。
たとえば、ねこぜ、猫背

(日本語) ⇔ 駝背(中国語)
猫で喩えるのと、駝で喩える言葉の面白さを感じますね。
喜愛猫の日本人創造了大量有关猫的词汇。
比如：ねこぜ、猫背

(汉语) ⇔ 駝背(汉语)
一个用骆驼比喻，语言很有趣吧！



文・画：空海

編集後記
今回は、10周年記念事業(10・20集会)を特集した。数年前から計画していた節目の一大事業で、内容が盛りだくさん。3時間半のテープおこしは苦難の連続。なかなか聞き取れず何度も聞き返した。記事を書き始めるに紙面に収まり切れず多くの文章がこぼれていく。続編を次号(2019年夏号)に掲載するか?・・・時期が遅い。結局本号の頁数を増やすことにした。それでもテープおこしの五分の一くらいしか紙面が取れない。集いのポイントが皆さまにお伝えできているのか心もとない。
なお、この記念事業の写真撮影は宗景眞利子さんにボランティアでお願いしました。ありがとうございました。
今年もどうぞよろしくお願ひいたします。
(T)

防災研修
9月25日、学習者・スタッフ合同の防災研修を実施しました。2018年は台風が多発しました。そのため、風水害への備えについて、尼崎市災害対策課の岩崎係長から、パワーポイントを駆使して説明をしていただきました。
主な内容は、避難情報の名称変更(高齢者等避難開始、避難指示(緊急)など)、避難場所への誘導(誘導板・案内板)の紹介、避難行動、避難情報の入手方法、家庭でできる風水害対策など。ただ、中国人など外国人に対する外国語による情報

提供が充分でないため、今後の課題となりました。
(田村博志)
車内での意外な態度にビックリ! (中国の小さな話題)
2018年9月、中国の杭州に行ったときのこと。スーパーまで買物に行くため、地下鉄を利用した。車内は適度に混んでいたため、私は通路に立って仲間と雑談をしていた。するとそばに座っていた若者が、立ち上がって外国人である私に「どうせお座りください!」(中国語で)と声を掛けてくれた。一瞬あれっ!と思う

2019年明けましておめでとつございませう

コスモスの会10周年記念の集い(中国残留孤児の歴史と今後を考える)を開催



10月20日(土) 尼崎市内のアルカイックホール・ミニにおいて、「第4回中国残留日本人への理解を深める集い」(中国残留孤児の歴史と今後を考える)を開催しました。

この集いは、コスモスの会尼崎日本語教室開設10周年を記念して実施した事業です。
当日は、県内はもとより大阪、京都、奈良などから関係団体、支援者、行政関係者、市民など約180人の方々が参集されました。ジャーナリストの大谷昭宏氏の特別記念講演、コスモスの会宗景正代表の報告講演、休憩を挟んで、音楽のひとときでクラシック音楽を楽しんだのち、残留孤児1世2世と支援者をパネラーとして、シンポジウムを行いました。



「中国残留孤児」の歴史と今後を考える

残留孤児問題は過去のことでではない、私たちに突き付けられた現在の問題
(大谷昭宏氏の講演要旨)

大谷昭宏氏は「残留孤児の問題は、1945年、昭和20年に起きた遠い過去の事ではなく、今私たちが何をしているか、過去何をしてきたか、そしてこれから何をしなければならぬのかをしっかりと見据えるための、合わせ鏡のようであ

る」と述べて、残留孤児問題はまさに現在、そして今後の課題だと指摘された。

「当時の旧満州で、女性や子ども達、年配者がどんな目に遭い、どんな悲惨な思いをしたのか、あの時の真実、戦争の実感がやっと明らかになってきた。この問題は過去の戦争の問題ではない。これからは、本当に何があったのかを確認し、残しておかなければならない時代になった。

残留孤児の問題、労働力、女性問題、民族問題、これらは反省に立って現在の政治に本当に反映されているだろうか。合わせ鏡のようなら、こんな政治ではだめだ、こんな国じゃだめだ、このままだと大変なことになるといふことを残留孤児の問題は我々に突きつけている。

様々な歴史的、社会的問題をみると、この国があの73年前と全く同じことを延々と繰り返していることは明らかだ。今の国がやっている政治は、またこんなことをしているいいの

かという思いにさせられる。だから、残留孤児の問題は歴史ではなく、今の問題であると、つくづく感じ

る。中国人養父母は人の3倍も4倍も苦労して育てた子どもを日本に返してくれた。手塩にかけた日本人の子どもを、ご両親が待っているなら帰らなさいといつて手放してくれた。その子どもたちが帰ってきたら、日本は何をしたのか?彼らは中国では日本人だと憎まれ、日本では中国人と蔑まれたのではないのか。

コスモスの会がよく上演される「わたしたち、なにじんですか?」。自分の力では選べないことを批判の対象にし、あげつらつのが。それはしてはいけないことであるはずだ。いわれのない差別に苦しむ人に真正面から向き合い、そこにある

真実から目を背けるべきではない。

1945年は、この世に生を受けた人間よりも、心ならずも殴らずも戦場で、あるいは満州の荒野の中で失われた命の方が多かった。私と同じく、この年に生まれた吉永小百合さんは、原爆の悲惨さを語り伝え続けている。そして私は残留問題にかわり続けている。目を見張る豊かさや平和の中で、「残留日本人のみならず、せめて戦争だけは絶対にしません」と誓いきれるのか?決してその思いを消してはならない、そのことをしっかりと心にきざさんでおきたい。だんだんと残留孤児問題が遠ざかっていく中で、コスモスの会、尼崎市が非常に力を入れてこの問題に取り組んでくださることに心から敬意を表したい。
大谷氏は、ジャーナリストとしての厳しい目線で、淡々と、また時に熱い想いを込めて残留日本人問題を語られた。
(田中いすみ)



大谷昭宏さん